

氏 名(本 籍)	かわむらしげお 河 村 茂 雄 (東 京 都)		
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,370 号		
学位授与年月日	平 成 10 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	心 理 学 研 究 科		
学 位 論 文 題 目	教師特有のビリーフが児童のスクール・モラルに与える影響		
主 査	筑波大学教授	教育学博士	田 上 不二夫
副 査	筑波大学教授	教育学博士	新 井 邦二郎
副 査	筑波大学教授	教育学博士	杉 原 一 昭
副 査	筑波大学助教授	博士 (心理学)	庄 司 一 子

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### 1. 論文の目的

主な目的は、児童のスクール・モラルに影響する教師の指導行動・態度を明らかにし、その指導行動・態度を生み出す重要な要因として、教師が持つ管理的なビリーフの存在を明らかにすることである。そしてこのビリーフを修正することによって、教師の指導行動・態度を改善し、児童のスクール・モラルが上昇することを確かめることである。

### 2. 論文の概要

第 1 章では、問題の所在と本研究の目的について論じられた。今日の不登校などの学校教育問題は、一般の児童の学校におけるスクール・モラルの低下が背景にあることが指摘され、それへの対応として学校制度の問題、教育実践をする教師の問題の検討の必要性が論じられ、本研究では後者の問題に焦点が当てられた。

第 2 章では、児童のスクール・モラルに影響を与える要因が検討された。児童のスクール・モラルの高さは、学級内におけるいじめ被害や級友とのトラブルのない状態、学級内で承認されている状態と有意な関係があることが認められた。そして児童のスクール・モラルは、児童の学級集団に対する適応を測る側面を持つことが明らかにされた（研究 1）。次に、児童のスクール・モラルに重要な影響を与える要因として、教師の指導行動・態度の特定のタイプが指摘された（研究 2）。さらに同一学級に在籍中の児童のスクール・モラルは、時間経過による変化が認められないことが確認され、教師の指導行動・態度にも同じく変化が認められないことから、その指導行動・態度の背景に教師の固定されたビリーフの存在が想定された（研究 3）。

第 3 章では、教職経験と教師特有のビリーフの関連が検討された。先行研究から、教師は教職の特性や教師がおかれている社会的環境から、共通する職業文化すなわち教師文化をもち、その影響を受けた教育実践がなされていることが示唆された。そして教師は教師文化の影響を受けた自己防衛的な教師特有のビリーフのもとに教育実践を行っていることが明らかにされ、教師特有のビリーフの特徴として児童の統制・方向付けのビリーフ、学級経営の規則・慣例主義のビリーフ、集団主義のビリーフが明らかにされた。すなわち教師が児童を集団として管理しようとする図式が教師特有のビリーフから確認された（研究 4）。これらの教師特有のビリーフの絶対的思い込みの強さは、教職経験から生じ、児童に対する指導行動・態度に表れることが確認された（研究 5）。

第 4 章では、教師特有のビリーフと指導行動・態度ならびに児童のスクール・モラルとの関係が検討された。

教師特有のビリーフの絶対的思い込みの強い教師は、日常的教育実践で児童を認知する基準が限定する、コミュニケーション・ユーモアが欠如する、権威的・管理的なリーダーシップをとることが確認された（研究6）。そして教師特有のビリーフの絶対的思い込みの強い教師は、集団維持機能（M機能）と「教師の魅力・対応」の勢力資源が有意に低いことが確認された（研究7-1）。さらにPM式指導類型のPM型で、かつ「教師の魅力・対応」の勢力資源が相対的に高く「罰」の勢力資源が相対的に低い教師の学級で、児童のスクール・モラルは最も高くなり、pm型でかつ「教師の魅力・対応」の勢力資源が相対的に低く「罰」の勢力資源が相対的に高い教師の学級で児童のスクール・モラルは最も低くなることが確認された。教師の指導類型では、強いM機能を背景にした強いP機能を発揮する教師の学級で、児童のスクール・モラルが高いことが明らかにされた。教師の勢力資源では、児童のスクール・モラルに対して「教師の魅力・対応」の勢力資源が正の予測子、「罰」の勢力資源が負の予測子であることが確認され、「教師の魅力・対応」が相対的に高く「罰」の勢力資源が相対的に低いタイプの教師の学級で、児童のスクール・モラルが有意に高いことが認められた。教師特有のビリーフの絶対的思い込みの強い教師の学級で、児童のスクール・モラルが低下していることが認められ、直接的に児童のスクール・モラルを低下させるビリーフとして管理教育の背景になると考えられる「児童管理・生活指導のビリーフ」が明らかになった（研究7-2）。

第5章では、教師のビリーフに対して介入し、ビリーフの変容による児童のスクール・モラルへの影響が検討された。児童のスクール・モラルを向上させるための教師の指導行動・態度への介入として、教師の価値観や教育観および児童認知をビリーフの視点から見直し、その絶対的思い込みの強さを修正することによって、教師の指導行動・態度を変容させる「教師のビリーフ介入プログラム」が作成された。この介入プログラムを教師に実施した結果、教師の自己防衛的なビリーフである教師特有のビリーフの絶対的思い込みの強さが低下し、集団維持機能行動と「教師の魅力・対応」の勢力資源が有意に上昇した。そして児童のスクール・モラルも有意に上昇したことが確認された。

第6章の全体的考察では、本研究の教育的意義について論じられた。現在の日本の不登校問題などの学校教育の病理に対して対策がたてられているが、必ずしも効果的とはいえない。日々の教育実践において、児童生徒を教師が自分の考えるように“指導”することから、児童生徒の個性の発揮や能力の伸長及び生涯につながる学習意欲の形成を教師が“援助”することへの転換が求められている。ところがこれが容易ではないことが本研究で明らかにされた。それは教師個人の枠をこえ、長い年月をかけて受け継がれてきた教師社会特有の教師文化の影響があると考えられる。

今後、従来の教師文化の枠を越える、教師の教育に対する理念とそれに相応する指導行動・態度の在り方、それを日々の実践に生かす具体的な資料とモデルの提示などについて論じられた。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、これまで心理学研究のなかで手が付けられていなかった、教師の指導行動・態度を生み出す教師に特有の管理的ビリーフの存在を明らかにし、それらのビリーフを持った教師の指導行動・態度が児童のスクール・モラルを低下させていることを実証した点に独創性が認められる。さらに教師の管理的ビリーフに介入し、それを修正することによって、指導行動・態度が変わり、児童のスクール・モラルに影響が及ぶことを明確に示したことは、今日の日本における教育に多大な示唆を与えるものと思われる。

不登校やいじめ・非行や校内暴力などの問題は、学校において一般の児童・生徒たちが達成意欲を失い、スクール・モラルが低下していることと密接に関係している。本研究は、これらの問題を解くための有力な手がかりを与えている点で、社会的価値が高い。

ただ本研究では教師の管理的ビリーフの影響について明らかにしているが、教師として必要とされるビリーフ

もあるはずである。この点についての課題が残されているが、スクール・モラルに影響を与えている重要な要因について明らかにしたことで、頭書の目的は達成しており、その学問的意義は高く評価できる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。